

大学教務実践研究会
教員免許事務担当者講習会
2025年10月25日(土)
於:共立女子大学神田一ツ橋キャンパス

事例から学ぶトラブル事例への対応 ～実録、職員 9 to 5 + α ～

中京大学 教務センター
満田清恵
k-mitsuda@mng.chukyo-u.ac.jp

満田清恵のデジタル名刺



満田 清恵(みつだ きよえ)

大学職員としての歩み1

2005年4月

国立大学法人愛知教育大学にパートスタッフとして採用となる配属部署はキャリア支援課(3年間の有期雇用)

2007年7月

国立大学法人化後の多様な人材活用の取り組みにより、学内選考による採用試験が実施され、所属長推薦を受け、学内選考の第1期生として正職員となる

その後、法人運営企画課、教育創造開発機構運営課、秘書広報課、総務課、附属学校課(附属名古屋小学校・幼稚園担当)などを経験

大学職員としての歩み2

2016年4月

学校法人梅村学園中京大学に入職

入試広報課(1年)、情報システム課(2年)、中京大学校友会・教育後援会事務センター(3年)を経て、2022年4月から教務センター(現職)

学外活動

・名古屋SD研究会/大学教務実践研究会(2016年～)

「私たちは、どこまで学生に関わるべきか？」

— 学修者本位の支援と感情との向き合い方 —



① 学修者本位の支援とは

- 「学生の“学び”を中心に据えること」
- 「成績や履修だけでなく、学びへの姿勢や意味づけを支えること」
- 「“学生自身”＝学修者としての学生を見つめること」



② 感情と向き合う支援の難しさ

- 「支援の現場では、学生の不安・焦り・怒り・期待に触れることがある」
- 「職員自身も揺れる。共感したくなる。でも、距離も必要」
- 「“冷静”と“情熱”の間で、どう立つかが問われる」



③ 今日のゴール:「問いを持ち帰ること」

- 「支援の“正解”は一つではない」
- 「だからこそ、問いを持ち帰ることが大切」
- 「あなた自身の支援観を、本日の対話で揺らしてみてください」

データの紹介①

イギリスにおける障害学生の障害種別割合

- ・イギリスの2019/2020年の障害学生の割合は「17.3%」

Types of disabilities reported by HE students All modes and levels of study					
	2014/15	2018/19	2019/20	% of all disabilities in 19/20	Increase 14/15 to 19/20
A specific learning difficulty	105,550	110,795	111,820	34%	6%
Mental health condition	33,045	81,960	93,770	28%	184%
Two or more conditions	21,095	34,155	41,210	12%	95%
A long-standing illness or health condition	22,425	28,430	30,110	9%	34%
Another disability, impairment or medical condition	21,580	22,925	23,980	7%	11%
Social communication/Autistic spectrum disorder	6,755	12,815	14,120	4%	109%
A physical impairment or mobility issues	7,480	8,250	8,400	3%	12%
Deaf or a serious hearing impairment	5,065	5,485	5,675	2%	12%
Blind or a serious visual impairment	2,840	3,170	3,190	1%	12%
Any disability	225,835	307,985	332,275	100%	47%

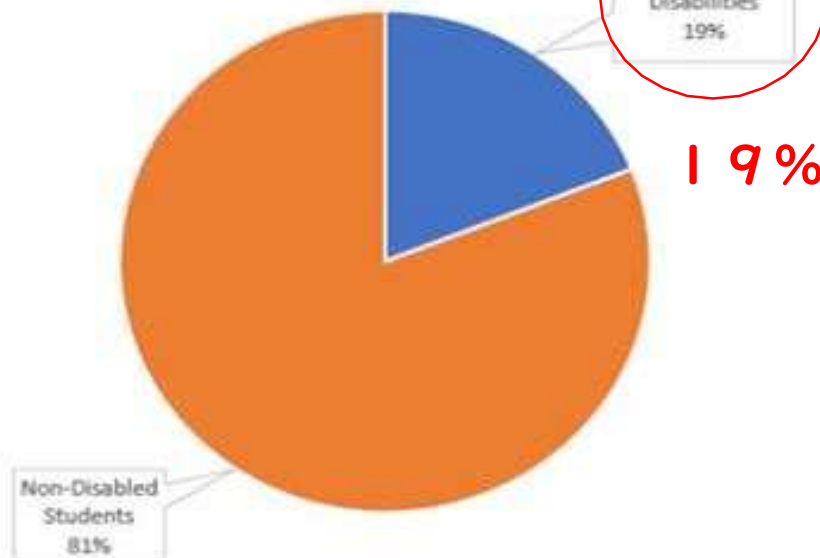
出典： <https://researchbriefings.files.parliament.uk/documents/CBP-8716/CBP-8716.pdf>

データの紹介②

アメリカにおける障害学生の割合 (19%) と障害種



Undergraduate Students¹



Top Five Disabilities Reported²

▪ Learning Disabilities	31%
▪ ADHD	18%
▪ Psychiatric Disabilities	15%
▪ Health/Chronic	11%
▪ Mobility	7%

学習障害

Sources:

¹U.S. Department of Education, National Center for Education Statistics. (2019). Digest of Education Statistics. 2017 (2018-070).

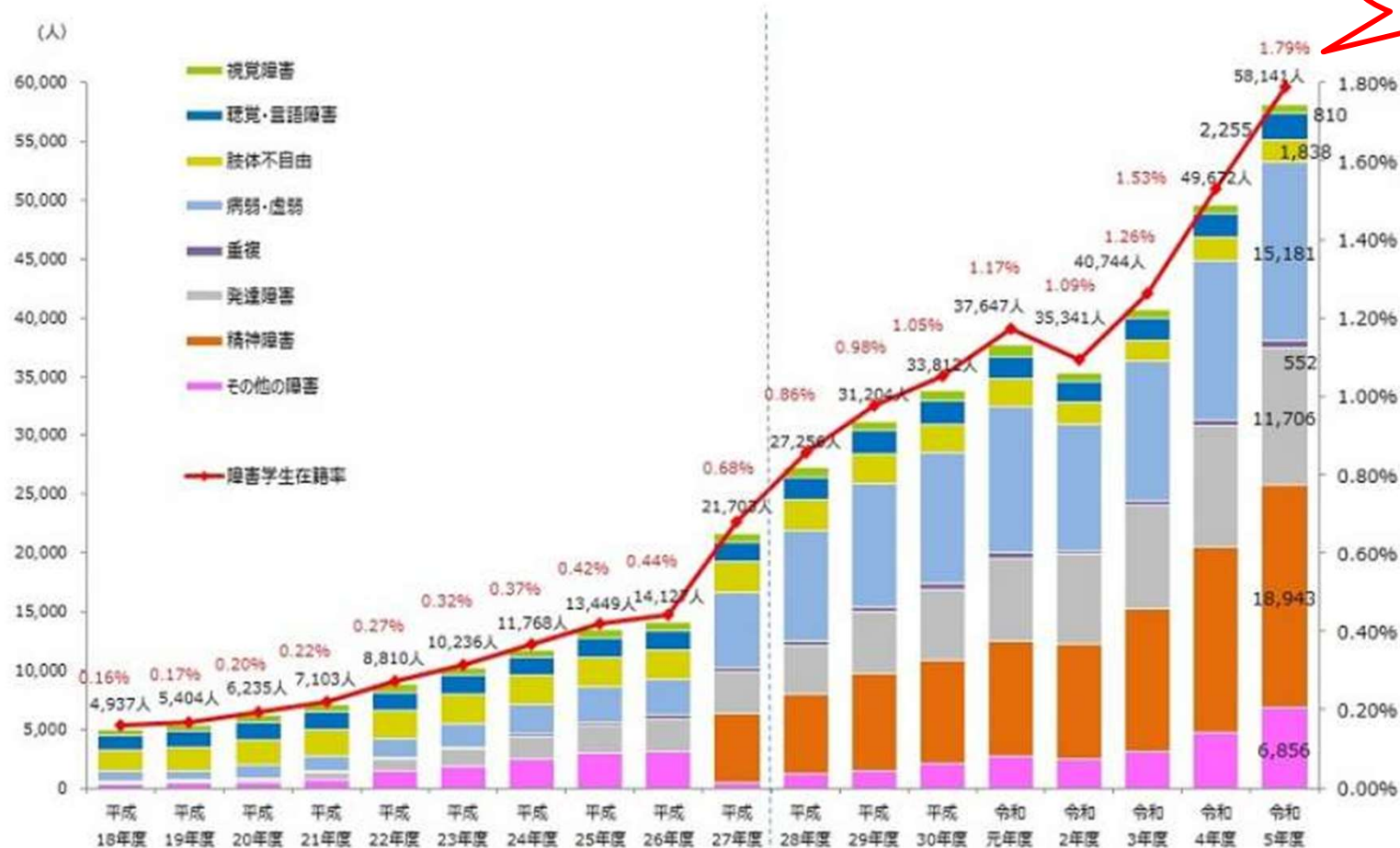
²Raue, K., and Lewis, L. (2011). Students With Disabilities at Degree-Granting Postsecondary Institutions (NCES 2011-018). U.S. Department of Education, National Center for Education Statistics. Washington, DC: U.S. Government Printing Office.

The National Center for College Students with Disabilities (NCCSD) is funded through a four-year grant from the Office of Postsecondary Education, U.S. Department of Education (P116D150005), and administered through the Fund for the Improvement of Postsecondary Education (FIPED).

データの紹介③

高等教育機関の障害学生数の推移 (JASSO, 2024)

令和5年5月1日現在における障害学生数は58,141人（全学生数3,247,212人の1.79%）で、前回から8,469人増、障害学生在籍学校数は998校（全学校数1,168校の85.4%）で前回から28校増となりました。



1.79%

令和6年度（2023年度）大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書

「ティップス先生からの7つの提案」

提案 1

学生が教職員と接する機会を増やす

提案 2

学生間で協力して学習を支援する

提案 3

学生の主体的な学習を支援する

提案 4

学習の進み具合をふりかえらせる

提案 5

学習に要する時間を大切にさせる

提案 6

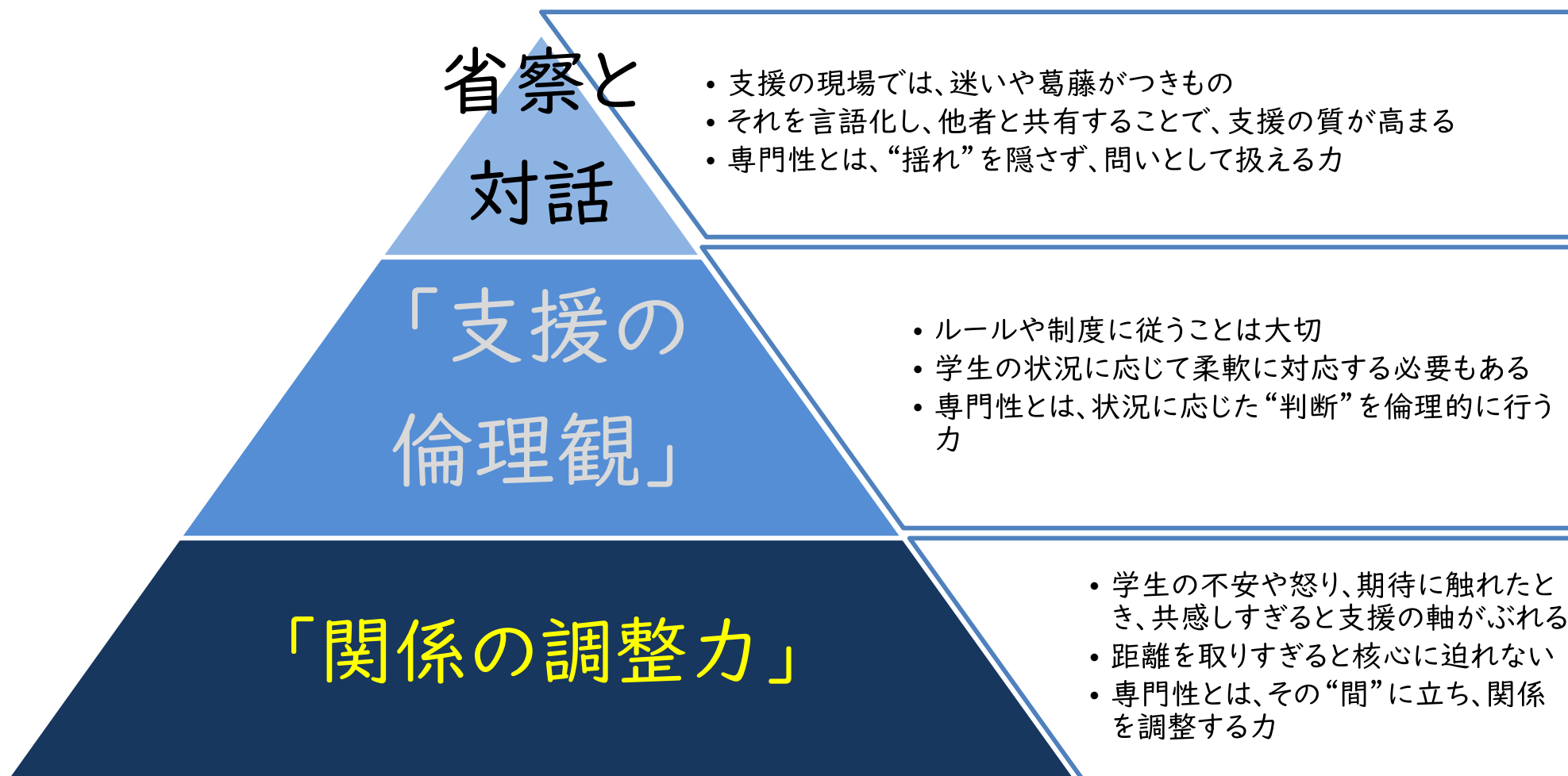
学生に高い期待を寄せる

提案 7

学生の多様性を尊重する

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/tips/img/seven_studentaffairs.pdf

支援者としての職員の専門性とは何か



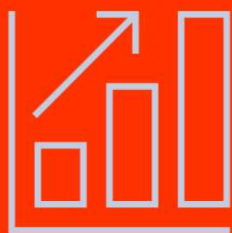
「支援者としての職員の専門性とは、
“冷静と情熱の間”に立ち、揺れながらも支援を成立させる力」

「“見えにくい”多様性とは何か」 — 制度の外側にある支援の必要性 —



① 明確な目的を持たず入学してきた学生

- 「履修相談で“何を選べばいいか分からない”と戸惑う」
- 「学修への動機が弱く、支援の焦点が定まりにくい」
- 「制度的な支援対象ではないが、確かに“支援が必要”な存在」



② 思いが強すぎて苦しむ学生

- 「理想や夢が大きすぎて、現実とのギャップに苦しむ」
- 「“頑張りすぎる”ことで孤立したり、学外活動に傾倒してしまうことも」
- 「支援のタイミングや深さに迷いが生じる」



③ 感情が支援の判断を揺らす場面

- 「学生の苦しみや怒りに触れ、職員自身も揺れる」
- 「“助けたい”という気持ちと、“踏み込みすぎてはいけない”という葛藤」
- 「公私の境界線が曖昧になる瞬間」

「“見えにくい”多様性は、制度の外側にある。けれど、そこにも確かに“学び”があり、“支援”が必要とされている。」

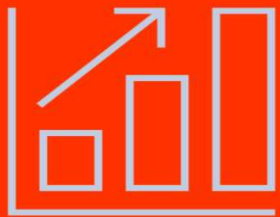
「“見えにくい” 多様性とは何か」 — 制度の外側にある支援の必要性 —



① 明確な目的を持たず入学してきた学生

- 「履修相談で“何を選べばいいか分からない”と戸惑う」
- 「学修への動機が弱く、支援の焦点が定まりにくい」
- 「制度的な支援対象ではないが、確かに“支援が必要”な存在」

「“見えにくい” 多様性とは何か」 — 制度の外側にある支援の必要性 —



② 思いが強すぎて苦しむ学生

- 「理想や夢が大きすぎて、現実とのギャップに苦しむ」
- 「“頑張りすぎる” ことで孤立したり、学外活動に傾倒してしまうことも」
- 「支援のタイミングや深さに迷いが生じる」

「“見えにくい” 多様性とは何か」 — 制度の外側にある支援の必要性 —



③ 感情が支援の判断を揺らす場面

- 「学生の苦しみや怒りに触れ、職員自身も揺れる」
- 「“助けたい”という気持ちと、“踏み込みすぎてはいけない”という葛藤」
- 「公私の境界線が曖昧になる瞬間」

「支援の境界線が揺れるとき」

— 関わりすぎず、離れすぎず、その“間”に立つ —



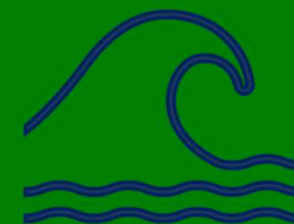
制度的対応（冷静）

- 支援の根拠が制度やルールに明記されており、対応の手順が定型化されている。
- 感情に左右されず、誰に対しても公平に対応できる安心感がある。
- 制度の枠に収まらない学生の困難には届きにくいこともある。



対話的支援（調整）

- 学生の状況を丁寧に聴き取り、制度の枠を踏まえながら柔軟に対応する。
- 職員の判断や関係性が支援の質に影響するため、個別性が高い。
- 感情に寄り添いつつも、支援の目的を見失わないバランスが求められる。

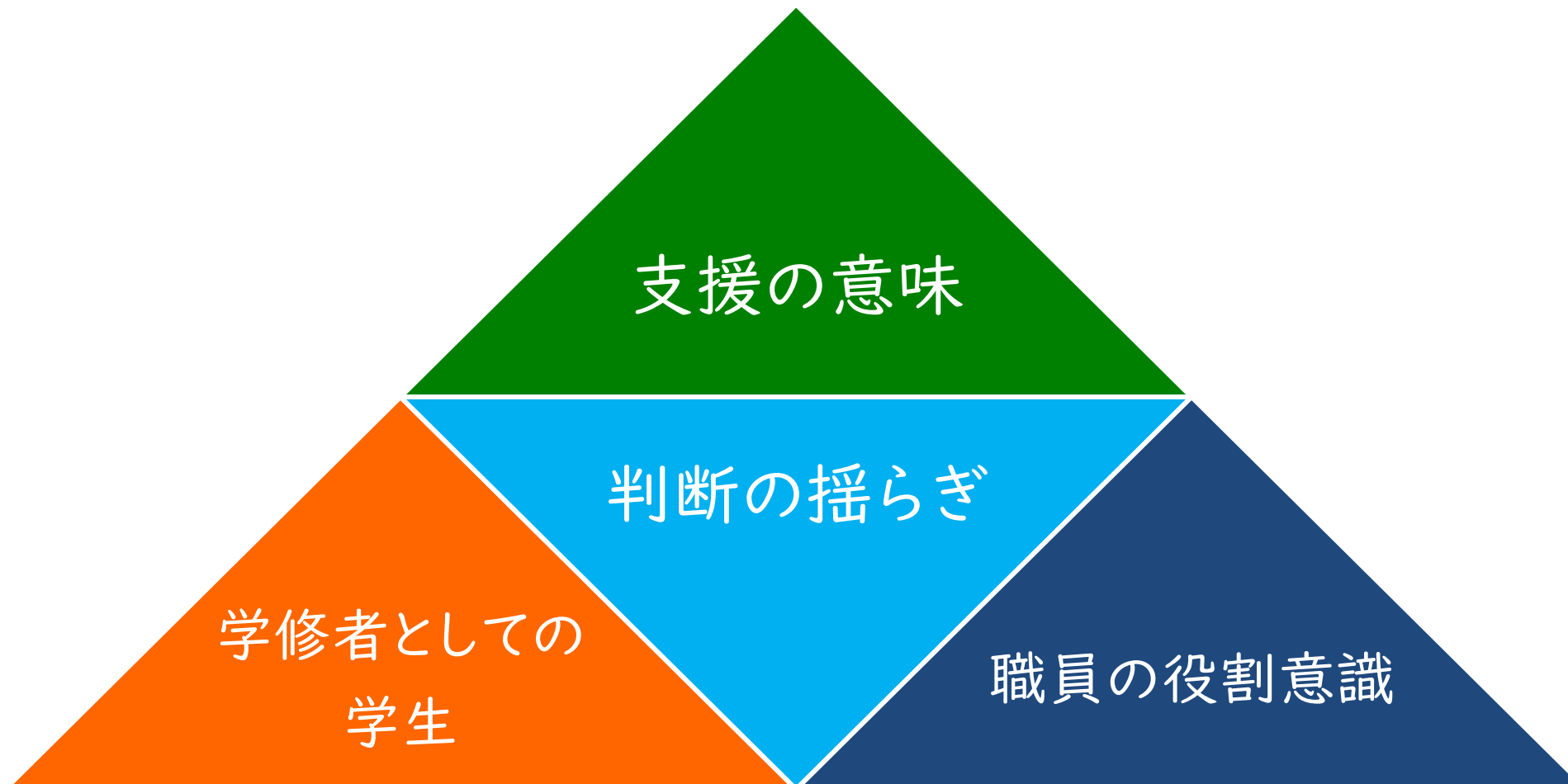


感情的巻き込み（情熱）

- 学生の苦しみ強く共感し、支援者自身が感情的に揺さぶられる。
- 支援の判断が「助けたい気持ち」だけで動いてしまう危険性がある。
- 境界線が曖昧になり、職員としての役割や限界が見えにくくなることもある。



「支援の判断をどう下すか」
— 揺れの中で、支援の“意味”を見つける —



支援の判断は、揺れの中でこそ磨かれる。
“意味”を問い続けることが、職員としての専門性につながる。

「支援の判断と意味づけ」

—相談を通して、学生の“学び”に意味を灯す—



① 学生の“学び”に意味づけを促す支援とは

- 相談は、単なる情報提供ではなく「意味づけの対話」
- 学生が「なぜこの授業を履修するのか」「何を得たいのか」を言葉にする場
- 支援者は、問いかけや傾聴を通して、学生自身の“学びの物語”を引き出す



② 支援者の役割は、“問い”をともに扱うこと

- 「この学生は、何に迷っているのか？」
- 「この選択は、どんな意味を持つのか？」
- 支援者が問いを投げかけることで、学生自身が考え始める



③ 気づきを促す

- 自分の考えや思いを自覚できるような促し
- 自覚できていないことは変えようがない
- 支援者は、気づきの“芽”を見逃さず、そっと支える存在

「あなたが最近、心に残った学生との関わりは？」
— 支援の“ゆらぎ”は、常にあなたの中にある —

「最近、学生との関わりで印象に残った場面
はありますか？」

「そのとき、あなたはどんな気持ちになりました
か？」

「あなたなら、どう関わりますか？」
— 支援の“かたち”は、問いの中にある —

ご清聴ありがとうございました。

参考文献・参考資料

清水栄子・中井俊樹 編（2022年）大学の学修支援Q&A、玉川大学出版部

中井俊樹 編（2021年）大学教育と学生支援、玉川大学出版部

名古屋大学高等教育研究センター（2007）大学生の学習・発達を支える教務学生担当職員

名古屋大学高等教育研究センター（2007）ティップス先生からの7つの提案 教務学生担当職員編

木村弘志（2023年）大学職員による「上手な」学生対応業務の遂行、大学教育学会誌第45巻第2号、pp.59-68

金井 壽宏・楠見 孝 編（2012年）実践知: エキスパートの知性、有斐閣

中井俊樹・宮林常崇 編（2023年）大学の教務Q&A、玉川大学出版部

清水栄子（2024年）スチューデントサクセスを支えるアカデミック・アドバイジング、大学時報pp.80-87

河合俊雄・田中康裕 編（2013）大人の発達障害の見立てと心理療法.創元社

宮口 幸治（2021）どうしても頑張れない人たち~ケーキの切れない非行少年たち2、新潮社

JAAA（日本アカデミックアドバイジング協会） <https://academic-advising.jp/>

筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局（BHE）教職員相談ネットワーク「RADD ネット」 <https://dac.tsukuba.ac.jp/radd/joint-base/raddnet/>

